

第1号議案 令和3年度事業報告に関する件

1、 協会のあゆみの概要

当会は1994年(平成6年)2月に高知市で任意の市民団体『高知県生態系保護協会』として設立。平成9年に高知県より社団法人に認可。2005年(平成17年)7月に名称を『社団法人生態系トラスト協会』に変更。公益法人の制度改革に伴い、2013年(平成25年)4月に『公益社団法人』に変更して認可された。2014年(平成26年)7月に、四万十ヤイロチョウの森ネイチャーセンターがオープン。

2016年(平成28年)4月1日より主たる事務所を高知市から四万十町に移転し、事務所機能とネイチャーセンター機能を統一して運営にあたってきた。

2002年3月に一口オーナー募金を呼びかけ、同年7月に1号地を四万十町(旧大正町)下道地区に取得。2020年(令和2年)3月までに、四万十町を中心に、高知県に303,6haのヤイロチョウ保護区や生態系保護区の森をナショナル・トラスト手法で取得した。また、2016年8月には、下道地区に取得したトラストの森に隣接して、株式会社王子ホールディングスが所有する260haの社有林と『ヤイロチョウ保護協定を結んだ。

さらに、2017年度からは、株式会社山崎技研のご支援を得て、『自然林再生プロジェクト』に着手。増えすぎた野生シカから自然林を守る調査研究や広葉樹の植樹活動、子どもたちが遊べるワンダーランドの森作り、原木シイタケの森作りなどにも着手した。

この間、環境省(四国のツキノワグマ個体群調査)、農水省(四国で越冬するツル類の保護調査)、高知県(国道に隣接するクマタカ営巣環境調査、鳥獣保護区調査、愛鳥モデル校の指導・愛鳥ポスターの審査等)、地球環境基金(ヤイロチョウ保護調査)、イオン環境財団(国際的なヤイロチョウ保護連携)、日本財団(ヤイロチョウを通じた環境教育)、日本グラウンドワーク協会(環境に配慮した人材育成事業)、こども夢基金(環境教育教材作りや自然体験バスツアー)等から受託や助成金を得て、各種調査・環境教育事業等を進めてきた。こうした28年間の活動の中で、ヤイロチョウ保護に関する記念すべき成果として、NHKBSプレミアム『ワイルドライフ』で四万十の森に生息するヤイロチョウが放映された他、ヤイロチョウ調査員が中心となって映像ライブラリーも作成した。

しかし、コロナ禍により2020~21年度は人が集まる活動のほとんどが休止となるなど大きな影響を受けたが、現在まで28年余り市民団体として活動を続けてきた。

2、ヤイロチョウ保護課題と対策

1) 大規模風力発電対策

四万十川を守る流域会議準備会の事務局として、2021年5月2日に杓子峠から土佐

湾に面した四万十市下田の大規模西南公園まで車を連ねて流域の視察ツアーを行った。

2) 外来種・サンジャク対策

新たな保護課題として、2019年4月に下津井地区と下道地区で初目撃された外来種サンジャクが、2021年4月には下津井地区の民家でタヌキ用の罠で捕獲されるなど数の増加傾向が見られるにつれて、四万十ヤイロチョウの森などの保護区ではヤイロチョウの確認頻度の激減、営巣繁殖が確認できないなどの異常が報告された。そのため、およそ20年前に20羽以上のサンジャクを飼育・逃走したといわれる愛媛県宇和島市の飼育施設を視察。被害対策は一日も早い方が良いという考えから、高知県に50万円の補助金を申請し、「危険な外来種・サンジャク情報募集」チラシを作成し、県を通じて猟友会などにも配布。生息分布調査や、捕獲実験を行った他、愛媛県自然保護課や南レク株式会社にも呼び掛けて、情報共有するための「外来種・サンジャク対策緊急検討会」を2021年10月、2022年2月、3月の3回開催した。

3、その他の事業

1) 自然林再生事業の推進 池田十三生理事からクヌギの苗木10本の寄贈を受け、3月末に親子1組3名の参加をいただいて植樹イベントを行った。

2) 生きものふれあい鶴田公園の管理 高知市にある鶴田公園の草刈りや花壇整備については、四万十町より草刈り機を軽四トラックで運び、役職員で整備作業を行った。

3) 広報・募金・寄附金

A、会報誌『森のしずく』は、経費節減のため、A4版8ページ～12ページで、138号(2021年夏号)、139号(2021年秋・冬合併号)の2回を発行したほか、2021年4月には大規模風力発電反対について、9月にはサンジャク特集について『森のしずく』138号の号外(A4表裏1枚)を発行した。

B、募金・寄附金は、2021年1月1日～12月31日までの1年間に、一口オーナー募金が匿名希望を含む21名から740,000円。活動支援寄附金が匿名希望を含む124名から1,366,976円、ヤイロチョウ保護募金は匿名希望を含む117名から490,400円。野鳥居・中西悟堂基金は11名から134,000円。市民アセス募金は1名から10,000円。合計2,741,376円の寄付金が寄せられた。

C、2020年に地酒『八色鳥』無手無冠募金ラベル作成に協力し、来客などにも勧めたがコロナの影響もあって普及が伸びなかった。

D、森の番小屋で飼育していたヤギ2頭は、森の番人の中村滝男が草刈り作業中の6月27日に手首を骨折したため春野町の提供者に返却した。

4) 講師の派遣

A、高知県立高知北高校からの要請を受けて、ヤイロチョウ保護の取り組みを紹介する講師を派遣した。

B、香南市立公民館より要請を受けて、3月17日に「ヤイロチョウの森に現れた未知の外来種」と題する講演に講師を派遣した。



C、例年、大阪自然史博物館で開催されていた「大阪自然史フェスティバル」や、東京ビックサイトで開催されていた「エコプロダクツ 2021」は、コロナウイルスのため中止となった。

5) 四万十ヤイロチウの森ネイチャーセンターの運営

常勤職員 1 名と、半年間の臨時職員、非常勤のアルバイト等により、来館者の対応の他、ホームページの更新、展示用の野鳥や動物の剥製の解説貼りパネル作成、業務日報の作成などの業務を行った。

4、委託・補助・助成・配分事業等

- 1) 年賀寄附金の配分事業を受けて、6月に新車の軽四トラックを購入した。
- 2) 王子ホールディングスの委託を受けて、自然観察歩道の延伸、ヤイロチョウの生態系調査を行った。
- 3) サンジャク対策を行うため、高知県環境共生課の「高知県豊かな環境づくり総合支援事業費補助事業」の補助金を申請して、検討会・普及啓発・捕獲実験などを行った。
- 4) 高知県緑の募金助成事業を受けて、「ヤイロチョウの日記念イベント」「ヤイロチョウのさえずる森を未来へ！ぬりえ・絵画・作文コンクール」を開催した。コンクールは山崎技研株式会社の協賛を得て記念品を購入した。

5、他団体の活動協力・支援事業

- 1) 5月に共同事務局団体の中西悟堂協会と、ネイチャーセンターで中西悟堂生誕 125周年イベントを計画したが、コロナウイルスのため中止した。
- 2) 四国ツル・コウノトリ保護ネットワークの事務局として、西日本で越冬するツル・コウノトリ類の生息地保全に関する情報提供を主としてメーリングリストで行った。

